2024年3月２０日東福岡教会祈祷会奨励詩編109編　松見俊

# 我が賛美の神よ、（応答）を差し控えないでください！

109編は敵対者への、2文字下げた呪詛が8〜20節まで続く、一種異様な歌である。申命記11:29は律法朗読に際し、民の応答に加えて「祝福」（bārak ゲリジム山 881m）と「呪い」（qəlālāh エバル山 940m）の交唱がなされたようである。日本では陰陽道などにおいて「呪詛」の伝統があるが、昨今ではすべてが「平板化」「自然調和的」であり、「呪い」などの激情は忌避されているのであろう。あるいはさらに陰湿になり、カルトなどに生き続けているのかも知れない。

頭書に「指揮者によって。ダビデの詩。賛歌。」とあるが、ダビデ本人が歌ったとは考えにくいが、軍人として敵対者が多く、憎しみの中に行き、憎しみの種を蒔いたダビデに相応しいのかも知れない。

1節後半の「わたしの賛美する神よ/どうか、黙していないでください。」は生々しく、リアルな祈りである。「わたしの賛美する神よ（’elōhĕ tehillātî 詩篇を「テヒリーム」と言う）」。私たちには、神の「沈黙」は遠藤周作の小説を引くまでもなく、深刻な問題であるが、ここで「沈黙」という言葉が使われているわけではない。「黙していないでください」は　‘al- tehĕraš 英語で表現すれば、do not hold で NRSV では、Do not be salient, God of my praise であり、KJV が「平和」という文字を補足して、Hold not thy peace, O God of my praise と翻訳する。Hold は「保つ」であるが「押さえる」「差し控える」を意味して、祈りへの応答、救済を差し控えないでくださいというような意味である。hāraš は基本的に「耕作すること」、「彫ること」、「形成すること」を意味するが、「自分の中に閉じこもり、保持している」ということか、どういう訳か「沈黙すること」を意味するようになった。

１．敵対するものたちの存在（２〜5節）

信仰の歌い手に敵対するものはまず「言葉」「口」で敵対する。「欺いて語る口」「偽りを言う舌」「憎しみの言葉」。また言葉だけでなく、行動も敵対的で、「戦いを挑んで来て」、こちらの愛情に対して敵意を返し、執り成しの祈りに対して、その善意に対して悪意を返す。愛しても憎む。

彼らは「神に逆らう者」（原語では単に「邪悪な者」rāšā）である。その口は、欺く者の口であり、敵対して大きく開いており、私に対して嘘を言う舌で彼らは語ってきたのである。彼らは私を憎しみの言葉でも「囲い込み」（səbābūnî）、理由なしに私と闘ってきた。私に愛のゆえに（tahat- ‘ahābātî）彼らは（弱腰とみて？）私の敵たちであるが、私はしかし、自分自身祈っている。そして彼らは、善のゆえに悪を、私の愛のゆえに憎しみを応酬してきている。

２．神が敵対者に対抗して下さい（６〜７節）

自分自身の善意や愛情、祈りが通用しないと思う時、信仰者は神ご自身が敵対者に敵対者を置かれることで対応してくれることを願う。「サタン」という言葉が用いられている。ここには一種の「応報思想」が見られ、これが8節以下の呪詛の考えに繋がるのであろうか。この連鎖を断ち切ることが必要であり、「だから、あなたが祭壇に供え物を献げようとし、兄弟が自分に反感を持っているのをそこで思い出したら、その供え物を祭壇の前に置き、まず言って兄弟と仲直りをし、それから帰って来て、供え物を献げなさい」（マタイ5:23）を想起すること。

詩人は敵対者が公正に裁かれて（bəhiššāpətōw, When he shall be judged)、彼をして非難あるものとし、彼の祈りをして罪（lahătā'āh）とならしめ給え。

3．呪詛（8～20 節）

この長い呪詛についてはいちいちコメントをしない。

4．神の祝福を求める祈りと感謝（21～29 節）

長い呪詛の後に、信仰者は「貧しく乏しい」自分を見つめ、主なる神に救い、祝福を祈り求めます。「主よ、わたしの神よ/御名のために、私に計らい/恵み深く、憐れによって/わたしを助けてください。」「わたしの賛美する神よ」で始まった詩は再び「わたしとあなた」の関係に戻り、「主よ、わたしの神よ」と呼わる。ここで「主」は Yahweh だけではなく、'ădōnăy Yahweh wə'attāh, You O my Yahweh the Lord と呼び掛け、いろいろあるが「最後には」（ləma'an）あなたの名のゆえに良いこと（tōwb）を行い、あなたの契約への忠実さ（ヘセド）のゆえに私を救って下さい（hassîlênî）と願う。自らの空しさを「貧しく乏しい」（'ānî wə'ebyōwn）と言い、私と私の心は内面において傷つけられていると告白している。人は土くれであり、実体のない、「移ろい行く陰のようにわたしは去ります。」（kəsêl-kintōwtōw nehĕlākətî, like the shadow when it declines I am gone）[いなごのように払い落されます。（nin'artî kā'arbeh）この形容は良く分からないが、上に下にと投げられる？服などに止まると払い落される？

24 節：「断食して膝は弱くなり/からだは脂肪を失い、衰えて行きます。」確かに食が細くなり痩せると膝を支える筋肉が細くなり両膝が痛む！まあ、脂肪はほどほどであろうが、私の肉体は脂が落ちていると言う。心身の衰弱である。25 節：「わたしは人間の恥。彼らは私を見て頭を振ります。」「人間の恥」（wa'ănî hāyîtî herpāh, 私は批判の対象となった）

そして、26 節で懇願の祈りが産みだされる。「わたしの神、主よ、わたしを助けてください。慈しみによってお救いください。」21 節に似ている。（'āzərênî Yahweh 'ĕlōhāy hōwōšîĕnî kəhasdekā）「ヘセド」によって救ってください。」そして敵たちは知ることになるのだが、あなたのみ手（単数）が（私の上に）あることを。これを Yahweh がして下さったことを！

敵は呪うが主なる神は祝福してくださる。（yəqallū – hêmmāh, 彼らをして呪わせよ、彼らをして、しかし、彼らが立ち上げる時に、あなたは祝福して下さい（wə'ttāh təbārêk qāmū)。両者の対比は最後に、「彼らをして恥じ入らせ、あなたの僕をして喜ばせてください」と願う中に見事に描かれている。

5．感謝と賛美（30～31 節）

最後は感謝と賛美で終わる。「わたしはこの口をもって/主に尽きぬ感謝をささげ/多くの人の中で主を賛美します。（'ōwdeh Yahweh mə'ōd bəpî - ūbətōwk rabbîm 'ăhallennū, ハレンヌー)主なる神は貧しい者の右に立たれるであろう。彼の魂を彼を有罪・非難する人々から救い出すために（kî-ya'ămōd lîmîn 'ebyōwn; ləhōwōšîa' miššōpətê napšōw）「ミシュパート」が神の公平な審判だけではなく、信仰の敵対者による「裁き」にも用いられることがわかった。

主なる神は人間たちの価値判断を越えて、主の慈しみを信じる者たちを救い、祝福をして下さる。

受難節においては、マタイ 27 章 39 節に詩編 109:25 が引用されていることを知ろう。